

対訳西鶴全集三

好好色色
一五代人女女

訳注

富麻
士生
昭磯
雄次

明治書院

麻生磯次<あそい・いそじ>

富士昭雄<ふじ・あきお>

〔略歴〕 明治29年千葉県に生まれる。
大正9年東京大学文学部国文学科卒業。
学習院院長をへて現在日本学士院会員。
文学博士。

〔略歴〕 昭和6年京城に生まれる。
昭和30年東京大学文学部国文学科卒業。
現在、駒沢大学文学部教授・東京女子
大学講師。

対訳西鶴全集 三

好色五人女・好色一代女

二八〇〇円

昭和四十九年五月二十日印刷

昭和四十九年五月二十五日発行

著者 麻生磯次
富士昭雄

発行者 明治書院

代表 三樹 彰

印刷所 大文堂

代表 梶原忠幸

発行所 株式会社 明治書院

東京都千代田区神田錦町一の十六

電話 二九四一五三三六

振替東京四九九一

©一九七四 麻生磯次

0393-24803-8305

高陽堂製本

凡 例

- 一 本書は上段に原文を翻刻し、下段にその対訳文を収載した。
 - 一 本文の作成にあたっては、最も信頼できる初板本を底本に選び、さらに諸本を参照して、可能な限り原文を忠実に翻刻するように努めた。挿絵はそのすべてを本文該当箇所に収めた。ただし、行移り・丁移りは原文によらず、なお適宜段落を設けた。会話に相当する部分に「」印をつけた。
 - 一 句読点 原文では黒丸点・と白丸点。が混用されていて、その位置も必ずしも厳密なものではないので、諸注を勘案して新たに句読点をつけた。
 - 一 漢字の翻字は、次のような方針によった。
 - 1 正字体 原文の正字体はそのまま正字とした。ただし一般に通用されていない正字体の活字はこれを避けた。
(例) 関↓間 疊↓疊
 - 2 略字体 原文の略字体の内、現在も行われているものはそのままとした。これらの中には俗字・通用字等があり複雑であるが、しばらく略字として扱う。(例) 塩、积、条、声、体、才、仏、宝、万、礼
- ただし、右と同じ字でも正字を用いてある所や、正字の行草体とまぎらわしい略字は、正字に翻字することにした。(例) 栄、覚、勦、観、帰、国、齒、断、変、来、恋

- 3 異体字 読みやすさを考慮して、次のように正字体に改めた。これらの中には古字・同字・俗字・国字などがあるが、しばらく異体字として扱う。(例) 菫↓喜、箒↓算、枚↓數、取↓最、秋↓杉、邊↓邊、役↓役
ただし、当時慣用のもので正字に直すにははばかれるような異体字や、特定の正字に直されないような同字は、特に残すことにした。(例) 菴、礪、哥、貞、鉢、柑、蘭、泪、寐、栳、婁
 - 4 当て字 当時慣用のものはなるべく残すことにした。(例) 社シヤ、迎ムカ、計ハカリ、風與フウヨ
 - 5 誤字・誤刻 明らかな誤字・誤刻や、固有名詞の誤字と思われるものは改めた。(例) 右ミドリ↓古コ、筑地チキ↓築地
 - なお次のように、誤字であっても当時広く慣用されたものは、残すべきではあるが、読みやすさを考慮して、ここでは正字に改めた。(例) 勒↓勤、苧↓州
 - 6 漢字につけられた濁点は、訓みを示すものとして妥当な振り仮名に改めた。(例) 共トモ↓共、嬉ウレシしシ↓嬉ウレシしシ
 - 7 反覆記号は原則として原文のままとしたが、「々」は通行の「々」とした。漢字の一字または二字分の語の反覆記号「く」は、それぞれ「々」または「々々」とした。(例) 國クニくクニ↓國々、是非シゼイくシゼイ↓是非々々
ただし、「申く」は「申々」とせず、原文のままにした。
- 一 仮名づかい 原則として原文どおりとした。ただし、衍字や明らかな誤りはこれを正した。
 - 一 振り仮名 原則として原文どおりにした。ただし衍字や明らかに誤りと思われるものは改めた。また、本来は本文中にあるべき活用語尾や助詞が、振り仮名中に含まれている場合は、原文のままとした。(例) 取トル、神田橋カミダハシたたる
 - 一 清濁 本文および振り仮名の清濁表記には誤脱が多いので、新たに削補をおこなった。(例) いへとむ↓いへども、書へし↓書べし、只ただ↓只ただ

- 一 半濁点 本文および振り仮名の半濁点の表記を欠くものにはこれを施し、半濁音表記をすべき箇所濁点のつけられていたのはこれを改めた。(例) さつはり↓さつぱり、ぼんと町↓ぼんと町、干瓢かんべい↓干瓢かんべい
- 一 特殊な略体および合字、連字体は現行の字体に改めた。(例) い↓候、お↓より、な↓参らせ候
- 一 語注 本文読解の便宜をはかって、各章の終りに語釈を注記した。
- 一 付録 西鶴の読解鑑賞の一助として、巻末に「西鶴小伝」「好色一代男解説」「西鶴略年譜」「付図」を収めた。本巻は本全集の第一巻であるので、西鶴の全貌を伝える意図で、特に「西鶴小伝」「西鶴略年譜」を収載した。「付図」は、「好色一代男」に関係の深いものを選んだが、紙幅に限度があり、本全集の他の巻々の「付図」もあわせて参照してほしい。

目次

凡例

好色五人女

卷一……………一

卷二……………三七

卷三……………五

卷四……………八

卷五……………一九

好色一代女

卷一……………一〇

卷二……………一五

卷三……………二七

卷四……………二九

卷五……………三七

卷六……………三五

好色五人女・好色一代女解説……………三七

付 図……………三六

ひめぢニ
すげがさ

好
色
五
人
女

巻
入
一

好色五人女 卷一

姿姫路清十郎物語

目録

① 戀は闇夜を昼の國

室津にかくれなき男有

② くけ帯よりあらはるゝ文

姫路に都まさりの女有

③ 太鞆に寄獅子舞

はや業は小袖幕の中に有

④ 状箱は宿に置いて来た男

心當の世帯大きに違ひ有

⑤ 命のうちの七百兩のかね

世にはやり哥聞ば哀有

一 恋は人を盲目にする意の謬。ここは恋の逢う瀬には闇夜がよいの意に用いている。

二 夜、燈火を昼のように明るくつけて遊興する所、遊里のこと。当時の世界の図にある鬼国（其人夜遊び昼身を隠す）、または夜国（今の北極圏）などの新知識を織り込んでゐる。

三 兵庫縣掛保（いぼ）郡御津（みつ）町。当時は播磨五泊りの一つとして、大名の参勤交代などで利用され、繁栄した。

四 縫い目が表に見えないように仕立てた帯。

五 命のあるうちに見つかってほしかった七百兩の金の意。謬の「命あつての物種」「命に過ぎたる宝なし」「命こそ宝」などをきかす。なお「命のうち」と「かね」（鐘）は俳諧の付合（つけあい）語。

戀は闇夜を昼の國

戀は闇夜を昼の國

春の海しづかに、寶舟の浪枕、室津はにぎわへる大湊なり。爰に酒つくれる商人に和泉清左衛門といふあり。家榮て萬に不足なし。然も男子に清十郎とて、自然と生つきて、むかし男をうつし繪にも増り、其さまうるはしく、女の好ぬる風俗、十四の秋より色道に身をなし、此津の遊女八十七人ありしを、いづれかあはざるはなし。誓紙千束につもり、爪は手箱にあまり、切せし黒髪は大綱になはせける。是にはりんき深き女もつながるべし。毎日の屈文ひとつの山をなし、紋付の送り小袖其まゝにかさね捨し。三途川の姥も是みたらば欲をはなれ、高麗橋の古手屋もねうちは成まじ。浮世藏と戸前に書付てつめ置ける。「此たはけいつの世にあがりを請べし、追付勘當帳に付てしまふべし」と、見る人は是をなげきしに、やめがたきは此道。

戀は闇夜を昼の國

春の海静かに宝船が碇泊する播州室津はにぎやかな大湊である。ここに酒造を業とする商人に和泉清左衛門という者が住んでいた。家は富み榮えて、なに一つ不自由なものとはなない。しかも男の子に清十郎といって、みめよく生まれつき、業平を絵に書いてもこれほどではあるまいと思われるほどの美しさ、いかにも女の好きそうな風采であったから、十四の秋から色道に身をもち崩し、この港に八十七人遊女がいたのを、ひとりとして契を結ばぬものはなかった。遊女と取り交わした誓紙は積もって千束になり、遊女に剝がせた生爪は手箱に溢れ、切らせた黒髪は大綱になわせるほどであった。女の黒髪には大象もよくつながれるというが、この真心をこめた綱では、いかに嫉妬深い女でもおとなしくつなぎとめられるであらう。女からの毎日の届け文は積もって山を成し、定紋を付けてよこした小袖は手も通さず、そのまま積み重ねておいた。三途の川の奪衣婆もこれを見たら嘔然として、欲を棄ててしまふだらうし、高麗橋の古着屋もあまり数が多いのでいちいち値ぶみをすることもできない。そこで浮世藏と戸口に書

三



其比はみな川といへる女郎に相馴、大かたならず命に掛て、人のそしり世の取沙汰なんともおもはず、月夜に灯燈を昼ともさせ、座敷の立具さし籠、昼のない國をしてあそぶ所に、ござかしき太鞍持をあまたあつめて、番太が拍子木、蝙蝠の鳴まね、やりてに門茶を焼せて、哥念仏を申、死もせぬ久五郎がためとて尊靈の棚を祭、楊枝もやして送り火の影、夜するほどの事をしつくして、後は世界の圖にある裸鳴とて、家内のこらず、女郎はいやがれど、無理に帷子ぬがせて、肌

の見ゆるを
はじける
中にも
も吉崎と
いへる十
五女郎、
年月かく
し來りし

きつけてしまいい込んでおいた。「この愚か者はそうしておいて値上がりを待つ気かも知れないが、それはとんでもない話で、おつけ勘当帳に名前をつけられるだろう」と、人々は心配するのだが、さてはやめにくいのは女の道楽である。

そのころは皆川という女郎に馴染を重ね、たいへんなのぼせようで、命までもと思ひ込み、人のそしりや世間の噂も馬の耳に念仏であつた。諺に「月夜に提燈」というが、清十郎はそれどころではなく、真昼間提燈をとませ、座敷の戸障子をしめきつて、ここばかりは昼のない國にして遊んでいる始末、そこへ小取り回しのきく幫間をおおぜい集め、夜番の拍子木を打つ真似をする者もあれば、蝙蝠の鳴く真似をする者もある。遣手に供養の門茶をたかせ、歌念仏を唱えて、死にもせぬ久五郎のためだといつて、盃蘭盆の精霊棚をつり、魂祭りの真似をし、空殼の代わりに楊枝をたいて送り火とするなど、夜することは、なんでもし尽くして、その後は世界地図に見える裸体國の真似をするといつて、家内中のものを残らず裸にし、女郎たちがいやがるのを無理に帷子を脱がせたので、素肌を見られるのを恥ずかした。そのなかでも吉崎という困女郎が長年隠し通してきた腰骨の辺の白なままずを、人々が見つけて、鯨は竹生島弁才天のお使い、「生弁天様よ」と人々が拝んだが、そのためにかえって一座の興がさめてしまった。そのほかにも気をつけて見れば見るほど、人の裸体というものは見苦しいもので、しまいはだんだん座が白けて、



腰骨の白
なまず見
付て、「生
ながらの
弁才天
様」と、
座中拜み
て興覺け
る。其外、

氣をつくる程見ぐるしく、後は次第にしらけておかしからず。
かゝる時、清十郎親仁腹立かさ成、此宿にたづね入、思ひ
もよらぬ俄風、荷をのける間もなければ、「是で焼とまりま
す程にゆるし給へ」と、さまざま託ても聞ず、「兎角はすぐ
にいづかたへもお暇申で、さらば」とてかへられける。みな
川を始女郎泣出してわけもなふなりける。太鞍持の中に闇の
夜の治介といふもの少もおどろかず、「男は裸が百貫、たと
へてらしても世はわたる。清十郎様せき給ふな」といふ。此

戀は闇夜を星の國

おもしろくなくなった。

こういう騒ぎの中に、清十郎の親父は息子の不行跡に腹を据え
かね、この家を探し当てて来た。俄かの大風に火事が起こり、荷
物を片づける暇もないようなもので、とり乱した座敷の中で清十
郎は、「これで色狂いはすっかりやめますから、お許し下さい」
と、いろいろ託びても親父は聞き入れず、「とやかくいうには及
ばぬ、すぐにごへなりと出て行け」といつて、自分も「どちら
様へも御無礼いたしました」とお暇申し、「さらば」といつて帰
つて行かれた。

皆川をはじめとして、女郎たちはみな泣き出し、その場はさん
さんのていたらくになってしまった。幫間のなかに「闇の夜の治
介」という男がいたが、少しも驚いた様子もなく、「男は裸でも
百貫の値打がある、禪一つでも世の中は渡れる。清十郎様、あわ
てなさるな」という。その言いくさが悲しい中でも滑稽に聞こ
え、その言葉を肴にしてまた酒を飲み出し、つとめて悲しみを忘
れようとした。

揚屋の方ではもう勘当のききめが現れて、手を叩いても返事を
せず、吸物の出る時にも出ないで、膳の上は淋しく、「茶を飲も
う」といえば、天目茶碗を両手に一つずつぞんざいに持って来
て、その帰りしなに油火の燈心を滅らして行く。座敷に出ている
女郎はひとりずつ呼んで引込ませる。さてもさても客によつて
待遇の変わるのは色宿の習いで、人がちやはやするのの一步小判

中にもおかしく、是を肴まかなにして又酒を呑のみかけ、せめてはうきをわすれける。

はや揚屋あびにはげんを見せて、手扣たたまでも返事せず、吸物すの出時淋さびしく、「茶ちやのも」といへば、兩の手に天目てんもく二つ、かへりさまに油火あぶらびの灯心とうしんをへしてゆく、女郎ぢやうらうそれへに呼よつたつる。

さても替かは色宿いろしゆくのならひ、人の情こころは一步小判いっぽこばんあるうちなり。

みな川が身にしてはかなしく、ひとり跡あとに残り、泪なみだに沈しづみければ、清十郎も、「口惜くちあしき」とばかり、言葉も命いのちはすつるにきはめしが、此女の同じ道みちといふべき事をかなしく、とやかく物思ものおもふうちに、みな川色を見すまし、「かたさまは身みを捨給すてたまはん御氣色ごきしき、去逆きやくは〜おろかなり。我身事わがみこともともに申まをたき事なれ共、いかにしても世に名残なごりあり。勤つとはそれへに替かへ心なれば、何事なにことも昔々むかし、是迄こゝと立行たてゆ。さりとはおもはく違ちがひ、清十郎も我を折をて、「いかに傾城けいせいなればとて、今迄いまのよしみを捨すて、浅あましき心底こころ、かうは有あまじき事ぞ」と、泪をこぼし立出る所へ、みな川白装束しろしやうぞくしてかけ込、清十郎にし

のある間だけである。

皆川の身にとつてはまことに悲しいことで、ひとりあとに残つて涙にくれていた。清十郎も「口惜くちあししい」とばかりほかに言葉もなく、いつそ死んでしまおうと覚悟をきめたが、そうなるこの女もいっしょにというであろう、それが悲しくて、あれやこれやと物思いに沈んでいるうちに、皆川は男の顔色を察して、「あなた様は身をお捨てあそばすお覚悟のようでございますが、さてもさても愚かなことでございます。私もいっしょにと申し上げたいところでございますが、なんとしても私にはこの世の未練みれんがございます。勤めの女は時と場合によって、いろいろに心の変わるものでございますから、何事も昔の夢、私との仲もこれまでと諦あきらめて下さいまし」といって座を立つて行つた。こんな薄情な女とは知らなかった、自分の思い違いであったと清十郎はがっかりし、「いくら勤めの身だからといって、今までの深い交誼かうぎを棄すて、これほどまでに心が変わるとは、あさましい心底である、まともな人間なら、こんな不人情はできないものを」と、涙をこぼして座敷を立ち出でようとするころへ、皆川は白装束しろしやうぞくの姿で駆け込んで来て、清十郎にしがみつぎ、「あなた様は死なずにどこへおいでなさいですか。さあさあ死ぬのは今じゃ」といって二挺の剃刀かみばさを取り出した。清十郎は先刻とは打つて変わった女の真情をまのあたり見て、「これは有難い」と喜ぶ時に、この家の人々が集まってふたりを引き離し、皆川は抱え主のもとに連れ帰

がみつぎ、「死すにいづくへ行給ふぞ。さあ〜今じや」と、
剃刀一対出しける。清十郎又さしあたり、是はと悦ぶ時、皆
々出合、兩方へ引わけ、皆川は親かたの許へ連かへれば、清
十郎は人々取まきて、内への御託言の種にもと、且那寺の永
興院へおくりとどける。其年は十九、出家の望長にこそ。

(卷一の一)

り、清十郎は人々を取り巻いて、いずれ勘当のお詫びの種にもな
るだろうと、菩提寺の永興院へ送り届けた。そのとき清十郎は十
九の若者であったが、そのまま出家したいという希望で、まこと
にあわれなことであった。

一 春・宝舟・枕は縁語。また海・舟・浪・湊は縁語。二 上方では節分の夜、宝舟の摺り物を枕の下に敷き、吉夢を祈った(日記紀事)。三 目録の注三参照。室津は「西
国第一の舟がかり、湯風呂あまた有、遊女町さかりて風流のよき所也」という(一目玉録)。四 美男名高い在原業平。五 室津の遊女には大夫はなく天神・田端(は
し)であった(色道大鏡)。またその数は「八十余人」という(一代男、巻五の三)。六 遊女が心変わりしないことを神仏に誓った文書。起請文(きししょうもん)。心中立の
一つ。用紙は多く熊野の牛王(ごおう)の護符を用いた。「千束」はたくさん束。七 遊女の心中立として、小指の爪を客に贈った。放爪(ほうそう)。八 心中立とし
て髪を切つて贈った。断髪。九 「されば女の髪すちをよれる綱には、大衆もよくつながら(徒然草、九)による。一〇 遊女から客に送る手紙。一一 遊女から客に贈
る小袖。遊女または客の定紋をつけた。一二 冥土の三途川のはとりで、亡者の衣をはぎとるといふ奪衣婆(だつえば)。一三 大坂高麗橋筋(大阪市東区)には古着屋が
多かつた(難波雀)。一四 好色藏の意。遊興にゆかりの品を取めた蔵。一五 安値の時に買い込んだ品を、値上がりの時売り払い利益を得ること。一六 正式の勘当
は、五人組、町の名主に届け吟味の上、奉行所に願ひ出て勘当帳に記載された。一七 「まことに愛著の道その根ふかく源とはし。(中略)かの惑ひのひとつやめがたきのみ
ぞ、老いたるも若きも、智あるも愚かなるも、かはる所なしとみゆる」(徒然草、九)。一八 誂。無用のおごりをいう。一九 目録注二の中の夜岡または東国などをきかす
か。二〇 期間。男若者。二一 一番太郎の略。江戸時代、町の夜書など雑役をした番人。辻番。二二 遊里で遊女の世話や監督をする年配の女。二三 陰曆七月一日か
ら二十四日ごろまで、寺参りの人に寺や街頭で湯茶を施した。摂待(せつたい)とも。二四 念仏に節をつけて、伏紐(ふせがね)の拍子で歌ったもの。門付け芸の一。
二五 久七・久三などと同じく下男の通称。ここは揚屋の下男。二六 益供養の供物をのせるため仏前に設けた棚。二七 当時の長き四、五寸の房楊枝。二八 益の送
り火に欠く卒敷(おがら)の代用。二八 当時の中国系統の世界地図に、女護島などとも記されていて、十五女郎とも書く。三〇 白癩。鯨の形の白い斑点を生じる皮膚病。
三二 鯨は竹生島弁財天のお使といわれた俗説(和漢三才図会等)により、鯨(なます)を鯨と見立てた。「なます」と「弁才天」は俳諧の付合。三三 俄風・荷をのける
・焼けとまるは、突然の親父の出現を急火にたとえた縁語。三三 清十郎に対し「とにかくすぐどこへでも出て行け」と言うのと、一座の者に「どちら様にも失礼致しま
した」と暇を告げ、「さらば」と言つて帰つたことをかけている。「お暇申てさらばとて」は謡曲の文句。三四 本と末の太さの同じ瓢箪を、あとさき知らずの洒落で「闇の
夜」と呼んだ。ここは向こう見ずの男に付けたあだ名。三五 諺。男は裸でも銭百貫(七十五万円くらい)の値うちがある意。三六 「ててて」の誤りか。「ててて」は種
(ふんどし)。種一本でも。三七 大夫・天神・田など上位の遊女を呼んで遊興する家。室津では風呂屋が揚屋であった。三八 駭。ここは勘当の反応。三九 すり鉢形
の茶碗。一つずつ運ぶのが作法。四〇 「変わりやすきは世の遊女」(諺)のもじり。「色宿」は、遊興する宿、揚屋・茶屋などをいう。四一 「人の情は世にある時」(諺)
のもじり。四二 一歩金。長方形の小さな金貨。一両の四分の一に当たる。四三 遊女が男に対して敬愛の意で呼びかける語。四四 遊女の勤めの身は客次第でその時に

戀は闇夜を昼の國

よつて心が変わるものだの意。四五 閉口する。参る。ここは意外なことだが、転じて遊女のこと。四七 白一色の衣服。ここは自害を覚悟しての死の出生ち。四八 意外なことにぶつかり驚く。四九 抱え主。五〇 親元。五一 檀那寺。菩提寺。五二 未詳。五三 釈迦が十九歳で出家した故事を踏む。西鶴はこの故事をよく使う(一代男、巻二の六等)。

くけ帯よりあらはるゝ文

くけ帯より現るる文

「やれ今の事じやは、外科^{げい}上^{じょう}氣付よ」と立さはぐ程に、「何事ぞ」といへば、「皆川^{みながわ}ちがい」と皆々なげきぬ。「まだどうぞ」といふうちに脈^{みやく}があがるとや。さても是非^{ぜいひ}なき世や。十日あまりも此事をかくせば、清十郎^{しよじろ}死^しおくれて、つれなき人の命、母人の申こされし一言に、おしからぬ身をながらへ、永興院^{えいこういん}をしのび出、同國^{どうこく}姫路^{ひめじ}によしみあれば、ひそかに立のき、爰^{こゝ}にたづねゆきしに、むかしを思ひ出^だてあしくはあたらず。日數^{ひかず}ふりけるうちに、但馬屋^{たじまや}九右衛門^{くさうゑもん}といへるかたに、見^みせをまかする手代^{てしろ}をたづねられしに、後々^{ごご}はよろしきの事にもと頼^{たの}にせし宿^{しゆく}のきもいられて、はじめて奉公^{ほうこう}の身とは成ける。

「ほんについ今の事じや、外科^{げい}医^いを呼べ、氣付^{きつ}け薬^{やく}を」と人々が大騒^{おほさわ}ぎしているので、「何事^{なにこと}が起^おこつたのだ」と尋^{たず}ねてみると、「皆川^{みながわ}が自害^{じがい}した」といって皆が嘆^{なげ}いている。「まだなんとか助^{たす}かるかも知れぬ」といっているうちに、とうとう脈^{みやく}があがってしまったというのである。さてさてどうにもならない浮世^{うきよ}ではあるよ。十日^{じゆっぴち}あまりもこの事を隠^{かく}しておいたので、清十郎^{しよじろ}は死^しに遅^{おそ}れてしまった。死^しのうとしてもままならぬは人の命^{いのち}である。母親^{はは}からの言^{こと}伝^{でん}もあつて、惜^{あは}しくもない身を生きながらえ、永興院^{えいこういん}をこつそり抜^ぬけ出し、同國^{どうこく}姫路^{ひめじ}に交誼^{かうぎ}ある人がいるので、そこに立ち退^ひき、訪^まねて行^いつてみると、その人は昔^{むかし}の縁故^{えんこ}を思い出して、悪^{あく}いもてなしもしなかつた。しばらく逗留^{とちゆう}しているうちに、但馬屋^{たじまや}

人たるものゝそだちいやしからず、こころざしやさしく、すぐれてかしく、人の氣に入べき風俗なり。殊に女の好る男ぶり、いつとなく身を捨、戀にあきはて、明くれ律義かまへ勤けるほどに、亭主も萬事をまかせ、金銀のたまるをうれしく、清十郎をすへへ頼にせしに、九右衛門妹におなつといへる有ける。其年十六迄男の色好ていまに定る縁もなし。されば此女、田舎にはいかにして、都にも素人女には見たる事なし。「此まへ嶋原に上羽の蝶を紋所に付し太夫有しが、それに見増程成美形」と、京の人の語ける。ひとついふ迄もなし、是になぞらへて思ふべし。情の程もさぞ有べし。

有時、清十郎、竜門の不斷帯、中ゐのかめといへる女にたのみて、「此幅の廣をうたてし、よき程にくけなをして」と頼しに、そこへほどきければ、昔の文名残りありて、取乱し讀つゞけるに、紙數十四五枚有しに、當名皆「清さま」と有て、うら書は違ひて、花鳥・うきふね・小太夫・明石・卯の葉・筑前・千壽・長州・市之丞・こよし・松山・小左衛

くけ帯よりあらはるゝ文

九右衛門という家で、店を任せる手代を求めていると聞き、行く末は都合のよいこともあると、身を寄せていた宿のきもいりで、生まれてはじめて奉公する身となつた。

清十郎は人としての育ちもよく、氣だてもやさしく、すぐれて利発で、人好きのする人柄である。ことに女に好かれる男ぶりであつたが、いつとなく身のなりふりも構わず、色恋にも飽きはたというふうで、明け暮れただ実直に勤めたものだから、主人も信用して何事もこれにまかせ、金銀のたまるのを楽しみに、清十郎を行く末の頼りに思っていた。ところでこの九右衛門の妹にお夏という娘があつた。今年十六になるまで、男の器量好みをし、いまだに定まる良縁もなかつた。この娘は田舎はもとより、都でも、素人女では見たこともないほどの美人であつた。「以前、京の島原に揚羽の蝶を紋所にした太夫がいたが、それにも見まさる美人だ」と京の人が話していた。いちいち書き立てるまでもなく、この一事に準じてその美しさを想像するがよい。情愛もさぞ深いことであらう。

ある時、清十郎は竜門の不斷帯を、仲居のかめという女に頼んで、「この帯の幅の広いのが氣にいらぬ。いい具合にくけ直し